

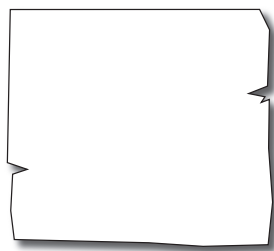
THE 7 FRAMES FOR LIFE

# 7つのワクワク枠

## ふたりのコンパス③

### 第6フレーム

「On」



「Off」

木岬 さんぽ  
KIMISAKI SAMPO

私がかっちなら、  
あなたはこっちよね

彼女<sup>る</sup>瑠音<sup>ね</sup>、おじいさん…と支え合う  
思春期さんぽのフルーツフル青春物語

SAMPO FRUITS



## ふたりのコンパス③

『Off On』

プロローグ

126

しばらくの間、水平線の方を眺めていたおじいさんが、ふいに、  
口を開いた。

「誰かがよかれと思って紡ぐ言葉——それがそのまま、役に立  
たり、ためになったり、ありがたかったり… そんなときも、確か  
にあるじゃろう。

じゃが、一方でな——それをそのまま鵜呑みにしたり、それ  
について特定の解釈しかあり得ないと思ひ込んだりすることで、害に  
なったり、傷ついたり、ひどい目にあったり… そんなときも、あ  
りうるんじゃよ」

「——ん？」

「それは、たとえ過去に自分自身で紡いだ言葉であったとしても同  
様じゃろう」

「——んん？」

「じゃから—— 言葉は、“誰が紡いだ言葉か”よりも、“誰にとつて、どんな意味のある言葉か”、“誰に何をもたらず言葉か”の方が、実際は、はるかに重要なんじゃ」

「——んんん？」

「なぜじゃと思う？」

「——」・・・「——たとえ、ある状況で、ピッタリ合う言葉であつても、——別の状況では、ズレた言葉になってしまうから？」

「うむ。その通りじゃ。言葉にも“相性”がある。恋愛と同じじゃな」

「——じゃあ、どうしたらいいの？」

「はて、どうしたらいいんじやろうかな？」

「——」

「——うむ。では、さっそく、次のフレーム、第6フレームを紹介しよう。

きつと、その答えにたどり着くための、よいヒントの1つになるじやろう」

「——1つ？」 そう尋ねながら地図を差し出した。

「そうじゃとも」 おじいさんは地図を受け取ると、それをゆっくり裏返した。

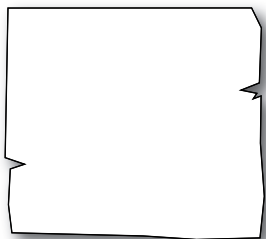
「では、行くぞ」

「はい、お願いします」

音楽——テーマ曲イン  
♪美しき自然 Beautiful Nature  
タイトル流れて。

# 第6フレーム

『On』



『Off』

## 127

「『Off On』じゃ」おじいさんは、そう言いながら  
紙の下側と上側を順番に指さした。

「そうすると——

例えば、“休む人生が『Off』の方向にあるなら、  
何かをやり続ける人生が『On』の方向にある”って  
ことだよな？」と僕。

「そうじゃな。

今のおまえさんにとっては、そのイヤイヤ感が解消  
されて、やる気が自然に湧いてくるまで、頭を使う勉  
強の方はしばらくお預け—— いわば“頭-お休みモード”の選択  
がふさわしいじゃろう」

「——うん」

「あー、ちなみにわたしは、朝早くからの肉体労働で、体をたくさん  
使っておるから—— 午後からは、たいてい“体-お休みモード”  
に入っとる」

「アハッ！ それが、おじいさんにとっての昼寝だったんだね？」

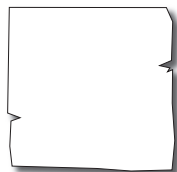
「そうじゃとも。

しかも、単に横になって体を休めているだけとは限らない。とき  
には、将来のことを思い描いておったり、かつての思い出を味わっ  
ておったり、瞑想にふけておったり… 頭の中が活発に働いてお  
ることがある。じゃから、じゃから、昼寝＝睡眠だとは限らない。

——少しは見直したじゃろ？ アッハッハッ！」

「アハハッ！」 ——とても見直した。

『On』



『Off』

『On』



『Off』

## 128

帰宅すると、家族はみんな留守だった。

心笑君がプレゼントしてくれた「北の国から'87初恋」の録画ビデオや、我が家にあった「北の国から'89帰郷」の録画ビデオを鑑賞しながら、しばらくの間、リビングでくつろいだ。

それから、自分の部屋に行くと、好きな曲を聴きながら、自分で撮りためた“お気に入り写真集”を眺めつつ、のんびりすごした。

それらの合間に、たまに自分の呼吸状態を観察してみた。

——おお、確かに、腹式呼吸になっているぜ。

そうして、自然に眠気を感じるようになった僕は、そのままベッドの上で横になると、目を閉じた。

## 129

目を覚ますと、外は薄暗い状態だった。

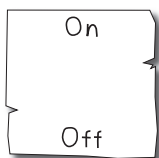
——夕方？ それとも朝？

時計を見ると、夕暮れどきであるとわかった。

起き上がってみると、そこに、さわやかな気持ちになっている自分、イヤイヤ感がなく、やる気を持って新たに勉強に取り組めそうな自分がいることに気づいた。

——これが、“本来の自分”ってやつ？

それから、とりあえず、『Off On』を書き入れてみた。



——こんな感じ？

そして——

「オンと…」 そう口にしたとたん、

音楽イン ♪ Soaring Up Into The Sky

フワリン！

ペーパー・コンパスが机を離れ、空中に浮かび上がったんだ。

「ワッ！？」 コンパスの針の絵が浮かび上がり、クルクルと勢いよく回っている——。

「キャハハイ♪ ありがとーう♪

これでやっと、思うままに——自由自在に空中遊泳できるようになったわ。キャハーン♪ 気持ちいい♡♪

フワリフワリ——

「ちょっと待って、ちょっと待って、——ええ?!」

目を丸くしながら、気持ちよさそうに空中遊泳しているコンパリーチェを眺めた。夢だ。夢にちがいない！ 前にも似たような夢を見たよ。デジャブ夢だ。…

「キャハハ♪ それに、よりいっそう自由自在にしゃべることもできるし—— それから、自由自在に大きさを替えることもできるよーん♪」 コンパリーチェは、グーンと大きくなってみせた。「キャホン♪ わたしの上に乗ってもいいよ〜♪」

「あ！？ や、やめとくよ」 あわてて断<sup>ことわ</sup>った。

あぶねえ。デジャブ悪<sup>あく</sup>夢<sup>む</sup>だ。…

それから、僕<sup>ぼく</sup>は、試<sup>ため</sup>しに口<sup>くち</sup>にしてみた。

「オフ？」

すると、コンパリーチェは元<sup>もと</sup>の大きさに戻<sup>おお</sup>り、そのまま机<sup>もど</sup>の上に舞<sup>つ</sup>い降<sup>く</sup>りた。コンパスの針<sup>はり</sup>の絵<sup>え</sup>も静<sup>せい</sup>止<sup>し</sup>した。

音楽フェード・アウト ♪ Soaring Up Into The Sky

—電<sup>でん</sup>化<sup>か</sup>製<sup>せい</sup>品<sup>ひん</sup>とかのスイッチ・オン、スイッチ・オフと同じ？

『On』

スイッチ・オン  
(電源オン)

スイッチ・オフ  
(電源オフ)

『Off』

それにしても、いったい、どこまでが現<sup>げん</sup>実<sup>じつ</sup>？ どこからが夢<sup>ゆめ</sup>？

## 130

それが夢<sup>ゆめ</sup>だとしたら、その夢<sup>ゆめ</sup>は、全<sup>まった</sup>く醒<sup>さ</sup>める気<sup>け</sup>配<sup>はい</sup>のない夢<sup>ゆめ</sup>だった。しかも、目<sup>め</sup>覚<sup>ざ</sup>めすつきり感<sup>かん</sup>といい、見<sup>み</sup>るもの聴<sup>き</sup>くもの触<sup>ふ</sup>れるものといい、どれもリアルそのものだった。

どうやら、すべてが現<sup>げん</sup>実<sup>じつ</sup>らしかった。

思い切<sup>おも</sup>って、再<sup>ふた</sup>び口<sup>くち</sup>にしてみた。「オン」

音楽イン ♪ Soaring Up Into The Sky



フワリン！

「キャハハハイ♪ フレーム・オーナーさん♪」

しばらくの間、そのリアルなフワリフワリを、ポカンとしながら眺めた。それから、我に返った僕は、口を開いた。

「いやー、まいったぜ。本当に空を飛べるとは——

これって“物理法則がくつがえる”ってことだよな？」

「鳥にとって空を飛ぶのが普通なように、わたしたちにとって空を泳ぐこと、空中遊泳が普通だよ”ってことなだけよ。人間だって、ロケットで地球から宇宙に飛び出たり、宇宙遊泳したりしているけど、物理法則には、ちゃんと従っているわよね？ それと同じよ。だから安心してね」

「——」・・・「——あ、でも、前から不思議に思っていたんだけれど、君らは何を食べているんだい？」

そう、エネルギーは、どこから得ているんだい？」

「それはね、空気中のわずかな水分から、わずかな“光などを含む電磁波”を使って分解して取り出した水素や電子—— これらを活用しながらエネルギーを得ているの」

「——超ハイテクじゃん」

「キャハハ♪ だから、あなたたちと同じように食べたり飲んだりしなくても大丈夫なのよ♪ 二酸化炭素から酸素を作ることもできるよ～ん♪ 植物みたいに——」

「——。 ——え？ じゃあ、どうしてオナラが出るんだい？」

「それはね。 ——イヤーン、もう、そんな恥ずかしいこと聞かないでよお」

「——」・・・——それにしても<sup>いったい</sup>一体どんなしくみなんだろう？

それも、ちゃんと<sup>ぶつり ほうそく</sup>物理法則に従っているから大丈夫よ♪

「——そうは<sup>い</sup>言っても、<sup>いったいぜんたい</sup>一体全体、<sup>なに</sup>何がどうなって、どうなっているんだい？ ——このままじゃ、<sup>ねむ</sup>ゆっくり眠れないよ」

「——。——わたしたちは、<sup>くうき と</sup>空気を取り込んで<sup>い</sup>生きているの。<sup>くうき</sup>空気の中には、<sup>すいぶん</sup>水分、<sup>にさんかたんそ</sup>二酸化炭素、<sup>さんそ</sup>酸素、<sup>ちっそ</sup>窒素…などの<sup>たんじゆん ぶんし</sup>単純な分子はもちろん、<sup>せいいたいごうぶんし</sup>ホコリ、<sup>かごうぶつ</sup>生体高分子、<sup>かごうぶつ</sup>化合物…などの<sup>ふくごつ ぶつたい</sup>やや複雑な物体も<sup>ふく</sup>含まれているのよ。それらを<sup>かつよう</sup>活用するためには、<sup>わたし</sup>私たちは<sup>くうき</sup>“空気を食べる”<sup>た</sup>必要があつて——<sup>ひつよう</sup>だから——<sup>た</sup>だから、<sup>で</sup>でちゃうの。それは<sup>まった</sup>全く<sup>む がい</sup>クリーンで無害なんだけどね」

「——。すごいじゃん！<sup>きみ</sup>君らは<sup>くうき</sup>空気を<sup>た</sup>食べて<sup>じょうか</sup>浄化してくれていてんだね！<sup>そらと</sup>まるで<sup>くうきせいじょうき</sup>空飛ぶ<sup>ぜんぜん</sup>空気清浄器だよ！全然<sup>は</sup>恥ずかしくないよ！<sup>ほこ</sup>むしろ<sup>た</sup>誇りにしていいくらいだよ。カッコよすぎるよ」

「キャホホホーイ♪ どうもありがとう。

——だから、<sup>ねむ</sup>ゆっくり眠ってね。<sup>みらい</sup>未来のが、ク、シャ、さん♡♪」

「イエーイ♪<sup>がくしや たまご</sup>学者の卵と呼んでくれーい♪」

「——ギェーイ」

「——。ギェーイ？ギェーイって何だい？ギェーイって——」

・・・って、もしかして——、——え？

そうで一す♪ わたしたちはツワリもするので一す♪

「ええ！？」

「キャハ♡<sup>にんしん</sup>もう妊娠しているのよ。おなかの中に——<sup>なか</sup>新しい、<sup>あたら</sup>いのちがいるの」

「だから、<sup>ま</sup>ちょっと待つて、<sup>ま</sup>ちょっと待つて、——ええ！？」

「——ギーイ」

「——」・・・「——あれ、大丈夫？ つわりって、やっぱりつらい？」

「あら？ 優しいのね♪ “つわりは、どんなしくみで起こるの？”  
なんて質問しなくていいの？」

「そんな野暮な質問、今は、どうでもいいよ。それより、大丈夫？」

「——ええ、大丈夫よ。そりゃあ、つらい部分はあるけれど——  
あたら新しい、いのちを授かった喜びと、赤ちゃんがどうか無事に元気に  
そだ育ってねという願いのおかげで、そのつらさをピョーンと乗り越え  
られるって感じ？ キャハハ♡♪」

そこにいるのは、すでに——  
母親になるべく一歩一歩前進して  
いる、たくましいプレママだった。

音楽フェード・アウト ♪ Soaring Up Into The Sky

## 131

男性と女性が結婚した以上、それはある意味、自然な流れで——。

うーむ。・・・

「アッ！」突然、コンパリーチェが叫んだ。

「え？ どうしたの？」

「今、恥ずかしいこと想像してたでしょ？」コンパリーチェが鋭い  
質問を投げかけた。

「——ちょっと待って、待って。——っていうか、想像できないよ」

「それでも、想像する努力はしていた——」

「そりゃあ、そちらでは、どんなしくみなのかなって素朴な疑問が、  
なくもなかったような気もするけれど——」

「想像しようとチャレンジしていた——」

「——」・・・——ハイ。

「ああ、やっぱりしてたのね！ えっちい！ ——近づかないで〜♪」  
そう言うと、コンパリーチェは部屋の中をフワリフワリと飛び回っ  
た。かと思うと——「逃げろ〜♪ キャハハ♪」そう言いなが  
ら、コンパリーチェは開いていた窓から外へ飛び出た。

「えっ!？」窓辺まで急いで駆け寄った。でも、コンパリーチェは  
夕闇の中に消えていた。

「な?——」・・・——まあ、そのうちまた帰ってくるだろう。  
そのとき、事の重大さを全く認識していなかった。

## 132

コンパリーチェのアップグレードの理由が、第6フレーム『Off  
On』であるのは、明らかだった。

例えば、コンパリーチェが机を離れて空に浮く、  
テイク・オフが『Off』の方向にあるとすれば、コ  
ンパリーチェが机の上に着く、オン・ザ・デスク  
が『On』の方向にある——そんなプチ・マップも作れるだろう。  
新しい“プチ・マップの作り方”は、ほかにも次々と見つかった。

『On』

机の上に着く  
(on the desk)机を離れて空に浮く  
(take off)

『Off』

## 『Off』

切れる (オフ・ライン)

(ペーパー・コンパスから、自転車から…) 降りる  
(地面から、地球から…) 離れる

でかけている

離れている、別々  
別れ

“本来の自分”を失っている

これは自分と違う

捨てる、手放す、負ける

忘れる (頭の中から消す…)

あれ (これ)、片方、一部

数、量…が減る

マイナス、欠落する、減損する

分ける、ずらす

ずれている (タイミングがずれている…)

釣り合いがくずれている (バランスがくずれている)

(服が…) きつい、ゆるい

間違い、偽、勘違い、ウソ、誤解、誤答…

(『コトバ』と『カタチ』がずれている)

疑う

課題と能力がずれている

思いと現実がずれている

夢にやぶれる、失敗する

“しよう”と“したい”がずれている

(『アタマ』と『カラダ』がずれている)

中断する、変化する

動きを止める、動作を停止する

運動し始める、動き始める…

つながる (オン・ライン)

(ペーパー・コンパスに、自転車に…) 乗る  
(地面に、地球に…) 着く、くつつく

帰宅している

そばにいる、一緒

出会い

“本来の自分”を保っている

これは自分だ

拾う、手に入れる、勝つ

覚える (頭の中に持つ…)

あれもこれも、両方、すべて

数、量…が増える

プラス、積み重なる、蓄積する

合わせる

合っている (タイミングが合っている…)

釣り合っている (バランスがとれている)

(服が…) 丁度である、ぴったり

正しい、真、真実、本当、正直、正解…

(『コトバ』と『カタチ』が一致)

信ずる

課題と能力が釣り合っている

思いのままに表現する (自由自在)

夢を実現する、成功する

“しよう”と“したい”が一致

(『アタマ』と『カラダ』が一致)

継続する、一定の動きをする

動き続ける、動作を維持する

止まり続ける、静止し続ける…

## 『On』

## 133

「ただいま〜♪」 コンパリーチェが帰ってきたのは、その翌日の  
 日曜の正午過ぎだった。

「おっ！ おかえり。——どこ行ってたんだい？」

「キャハハーン♡♪ ヒ・ミ・ツ？」

「ったく——」

「そっかあ。出会ってから、手をつないだこともないとはねえ〜♪」

「——な！？ それって、もしかして——」

「キャハハホーイ♪ バレた？ 溜音ちゃんのところに行ってたの  
 よ。キャハ♡ 実際に会うと、もっとカワイイ子ね？♡」

「ああ！？ か、勝手なことすんなよ！ 彼女、すっげえビックリ  
 するじゃん！」

「まあ、最初はね。でも、すぐ仲よくなっちゃった♪

いろいろおしゃべりしたり、悩みを打ち明け合ったり…

——キャハハハイ♪ 彼女のお姉さんも妊娠中なんだって。

楽しいね。

それに、あなたのこと、いっぱい誉めといたからね。

イメージアップ間違いなしよ。キャハン♡♪

——しっかりね♡♪」

「オフ」

コンパリーチェは机の上に舞い降り、針の絵の動きも止まった。

## 134

しばらく<sup>しん こきゅう</sup>深呼吸を繰り返した<sup>く かえ</sup>僕は、その<sup>こと ば</sup>言葉を口にした。

「オン」

フワリン！

「キャハハハイ♪」 フワフワ舞い始める<sup>ま はじ</sup>コンパリーチェ。

「——。あれ、さっきは—— ゴメン」<sup>おも おやま</sup>思わず謝った。

「キャハ？ さっきって、何<sup>なん</sup>のこと？」

「——」 . . .

「<sup>おうえん</sup>応援しているからね。瑠音<sup>る ね</sup>ちゃんと一緒<sup>いっしょ</sup>に力<sup>ちから</sup>を合わせて、夢<sup>あ</sup>を<sup>ゆめ</sup>実<sup>じつ</sup>現<sup>げん</sup>させてね♪」

「——あ、ありがとう」

「どういたしまして♪」

——あっ、そうだ。わたし、そろそろ、お昼寝<sup>ひる ね</sup>しなくっちゃ」

「あっと、そうだ。アレ、ソレ、妊娠<sup>にんしん</sup>、おめでとう。元気<sup>げん き</sup>な赤<sup>あか</sup>ちゃんを産<sup>う</sup>んでくれ」

「キャハ♡♪ どうもありがとうーう！♪」

それに、なんと言<sup>い</sup>っても、あのジュモンのおかげだからね♪

ランプベリーゴー、ランプベリーゴー♡♪

予定日<sup>よてい び</sup>は来年<sup>らいねん</sup>の春頃<sup>はるごころ</sup>なんだって——。

楽<sup>たの</sup>しみ〜♡♪ 間<sup>ま</sup>に合<sup>あ</sup>えば、会<sup>あ</sup>えるよ♪ キャハハホーイ♡♪

——じゃあ、またね。おやすみなさーい♪」

「おやすみ」

コンパリーチェは自分<sup>じぶん</sup>から机<sup>つくえ</sup>の上<sup>うえ</sup>に舞<sup>ま</sup>い降<sup>お</sup>り、静<sup>せい</sup>止<sup>し</sup>した。

その日の夕方、彼女から電話が来た。

「ビックリしちゃったよ！ 紙がフワフワ浮かんで、しゃべっちゃうんだもん！」

「こっちは、5年経っても、いまだに驚かされているくらいだから、さぞかし驚いたと思う。ビックリさせて、ごめんよ」

「ううん。今は、もう大丈夫。——それにしても不思議ね？」

「ああ、全く不思議だよ」

「——アノ、確かに不思議で驚いたけど、いろいろ話せて、楽しかったよ」

「そう？ そう言ってもらえるとありがたいよ」

「それで—— いつか、私にも、7つのワクワクの事を詳しく教えてもらえたら、うれしいんだけど… ダメかな？」

「ダメもなんも、喜んで。なんなら、今すぐ、教えようか？」

「フッフ。ありがとう。でも、今日はもう遅いから、また今度お願いします」

「そうだね。では、また今度」

「勉強、頑張ろうね」

「ああ、お互い、頑張ろう」

「おやすみなさい」

「おやすみ」



## 135

なつやす  
夏休み——

かのじょ ぼく と しょかん べんきょう おお  
彼女と僕は、図書館で勉強することが多くなっていた。

音楽イン ♪夏 Summer

きゅうけいじ かん いっしょ はなし ぼく  
休憩時間に、あれこれ一緒に話をするのは、僕らにとっての、さ  
さやかな潤いだった。

それぞれにがて かもく たが とくい かもく  
それぞれの苦手科目は、ちょうど、お互いの得意科目だったので、  
そのあたりを相談し合うこともできた。

ある日、ぼく、かのじょ、そうだん  
ある日、僕が、彼女に相談したときのこと——

こてん む み かんそう へたま はい  
「古典ってさあ、無味乾燥で、さっぱり頭に入らないんだ。どうし  
ようもないね？」と僕。

「フフッ。おおむかし ひと いま ひと おな じんげん  
「フフッ。大昔の人も、今の人も… 同じ人間よ。

そりゃあ、たしかに、ことば はじ いま ちが  
そりゃあ、たしかに、言葉を始めとして、今と違っているところ  
も多いわよ。でも、かんじょう うご だんじょ こいごころ に  
ところも、たくさんあるわ。

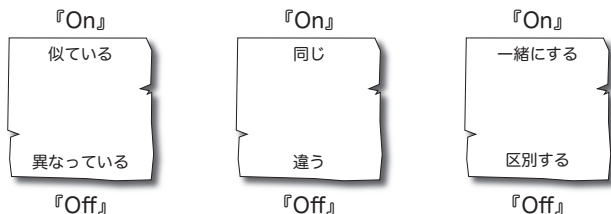
それに—— おおむかし ひと つむ ことば いま よ  
それに—— 大昔の人たちが紡いだ言葉を、今こうして読めて、  
その意味がわかるのって、何だかすごくない？」

「まあ、言われてみれば、そうかも——」

「——あっ、そうだ！

いま  
今、ひらめいちゃった。

たとえば、ことば ちが おな  
例えば、異なっている - 似ている、違う - 同じも、『Off On』の  
プチ・マップで表現できそうよ。くべつ いっしょ  
プチ・マップで表現できそうよ。区別する - 一緒にすると同じよう  
に——」

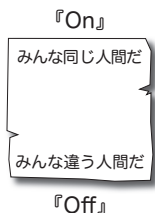


「あっ、そうだよ！

なるほど、これらも“ライフのあり方”の例なんだね

「そうよ。

だって、みんな<sup>ちが</sup>違う人間<sup>にんげん</sup>だも、みんな<sup>おな</sup>同じ人間<sup>にんげん</sup>だも、両方<sup>りょうほう</sup>とも  
 一理<sup>いちり</sup>あるんですもの♪」



音楽 ♪夏 Summer 136 に続く

## 136

かのじょ  
 彼女は、

じょし  
 女子であり――

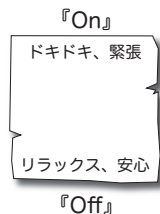
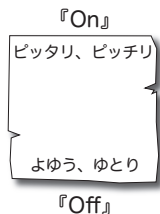
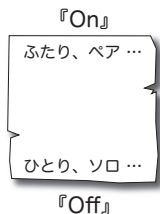
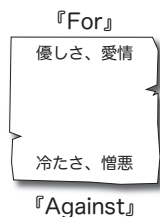
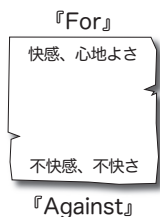
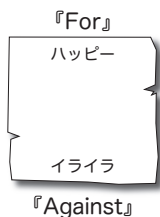
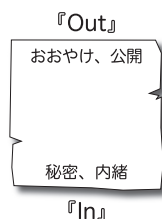
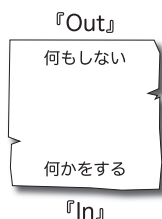
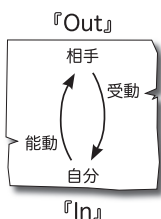
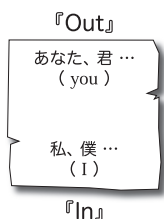
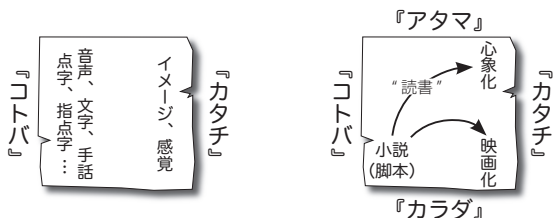
どくしょか  
 読書家であり――

しじん  
 詩人であり――

そして、よき“プチ・マップ・メイカー”だった。

かのじょ つぎつぎ あたら かんせい  
 彼女は、次々と新しいプチ・マップを完成させた。

それらの1つ1つは、どれもこれも、どこことなく<sup>かのじょ</sup>彼女らしかつた。



## 137

その日、彼女と僕は、図書館での勉強の気晴らしに、近くの公園まで散歩した。

公園のベンチに座っているふたり——。

「ねえ、どちらかと言えば、私の人生が『カラダ』の方向にあるなら、あなたの人生は『アタマ』の方向にあるわよね？」と彼女。

「——え？ どうして？」と僕。

「だって、私は“快 - 不快とか、感情とか……”感じて決めることが、あなたよりずっと多いと思うから。

それに女子だから、なおさら体のコンディションについて敏感だと思ふ。

『アタマ』

考えて  
〈あなた〉

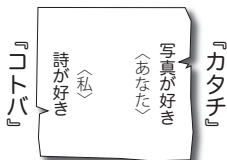
〈私〉  
感じて

『カラダ』

それに対して、あなたは、“よい - 悪いとか、しよう - するまいとか……”考えて決めることが、私よりずっと多いでしょ？」

「そう言われてみれば、そうかも——」 ——そうだったの？

「それに、どちらかと言ったら、“写真が好きなあなたが『カタチ』の方向にいるとすれば、詩が好きな私は『コトバ』の方向にいる”なんてことも言えるかもね？」



「ああ、なるほど——」

——彼女の方が、フレーム・マスターにふさわしい？

## 138

「それに——」 <sup>ほな つづ</sup>話し続ける<sup>かのじよ</sup>彼女。「第3フレームでは、どちらかと  
言ったら、<sup>わたし</sup>私がこっちなら、あなたはこっちよね」

「——」・・・「——え？」

音楽一時急停止 ♪夏 Summer

「だって—— どちらかと <sup>い</sup>言えば——」 <sup>かのじよ かお</sup>彼女の顔は、もものよう  
に、ほんのり<sup>あか</sup>赤くなっていた。

「待った！ まずいよ。そんな——。女の子が赤くなりながら——」

「——え！？ <sup>なん</sup>何のこと？

——。——ええっ！？ <sup>ちが</sup>違うわ。私、<sup>わたし</sup>そんなつもりで言ったんじや  
ないわ。ゼツタイ——」 <sup>なんじゅうばい</sup>ももの何十倍も<sup>かのじよ かお あか</sup>彼女の顔が赤くなったよ  
うに見えた。

「——え？ どんなつもりで言っていたの？」

「それは—— これまで、どちらかと <sup>い</sup>言えば、あなたの方<sup>ほう</sup>から先<sup>さき</sup>に  
<sup>のうどうてき</sup>能動的に<sup>わたし</sup>私に<sup>はたら</sup>働きかけてくれていたじゃない？ <sup>ぎやく</sup>逆に私が<sup>わたし</sup>受け身<sup>う</sup>で  
<sup>あと</sup>後から<sup>かん</sup>って感じ<sup>い</sup>で——。そのことが言<sup>い</sup>いたかったのよ。

だから—— <sup>わたし</sup>私が、いきなり、——そんなこと、<sup>い</sup>言うわけ<sup>い</sup>ないじゃ  
ない」 <sup>あか</sup>りんごのように赤<sup>かのじよ かお</sup>くなっている彼女の顔——。

「——そ、そうだよ。ごめん」 <sup>ぼく</sup>しまった。僕としたことが——。

・・・

「——。その、やっぱり—— <sup>おとこ</sup>男の子だと、<sup>こ</sup>そんなふう<sup>おも</sup>に思<sup>おも</sup>っちゃ  
うのかもね」

「いやいや、そんなことない、そんなことない。——って言うか、  
“そんなふう”ってどんなふう？」

「—— いちごのように赤くなっている彼女の顔——。

急いで視線を外した僕——。

しばらくの間、僕らは互いに視線をそらし合った。気まずい時間が流れた——。

「——赤いぜ。——いちごみたいに」と僕。

「——。そう言うあなたは、——スイカみたいよ」と彼女。

「——」・・・「——話題、変えようか？」

「ええ、そうしましょう」

そのときだ。

一匹の犬が、見ず知らずの人に連れられながら、こちらに近づいていることに気づいた。

——ラッキー♪

うん、ランプベリーのことを話題にしよう。

ナイスタイミング♪

「そう言えばさあ、僕も——」ランプベリーのことを話し始めようとした、まさに、その瞬間——僕は、目を大きく見開いた。

なんと、その犬は、ちょうどふたりの目の前で、片足を挙げ、木の幹に向けて用をたし始めたのだ。そうして、その犬は、その人とともに何事もなかったかのように、その場を去った。

再び、気まずい時間が流れ始めた——。

・・・あんの、やろう～！！

——って、あいつは、ちっとも悪くない。うん。いつも通りの自然なことだ。・・・もうランプベリーのことは、話題にできな

いぞ。どうしたらいいんだ？ どうする？ <sup>かのじよ こま</sup>彼女が困っているぞ。

<sup>なん</sup>何とかせねば——。 <sup>なん</sup>何とか——。

——ああ、<sup>あたま なか まわ</sup>頭の中が回らない。どうしよう？

・・・

「ブー！」 <sup>かのじよ とつぜん ふ</sup>彼女が突然吹き出した。「フッフッフッ…。フフフ…

アハハハハ！ アハハハハ！ …」

「アッハッハッ！ アハーッハッハッハッ！ アハーハッハッハッ！

…」

ふたりは <sup>いっしょ わら あ</sup>一緒に笑い合った。

音楽再開 ♪夏 Summer

のちに <sup>き はなし</sup>聞いた話によれば——

そのときのシチュエーションのみならず、<sup>ぼく かお そうとう</sup>僕の顔も相当おかしかったのだそうだ。 —— <sup>かお</sup>どんな顔だ！？

音楽 ♪夏 Summer 139 に続く

## 139

ともかくにも——

<sup>かのじよ こと ぼ か</sup>彼女の言葉を借りれば、「“<sup>かた</sup>ライフのあり方の、<sup>ちが</sup>ふたりの違い”も、  
7つのワクワク <sup>わく おし</sup>粋は教えてくれる」という <sup>けつろん いた</sup>結論に至った。

<sup>たと</sup>例えば——

<sup>かんが</sup>考えることと <sup>かん</sup>感ずること、<sup>たいせつ</sup>どちらを大切にしているか

<sup>か こ げんざい みらい</sup>過去と現在と未来、<sup>たいせつ</sup>どれを大切にしているか

プロセスと <sup>けつ か</sup>結果、<sup>たいせつ</sup>どちらを大切にしているか

なかみ がいけん たいせつ  
中身と外見、どちらを大切にしているか

こじん たいせつ  
個人とみんな、どちらを大切にしているか

のうどうせい じゅうどうせい たいせつ  
能動性と受動性、どちらを大切にしているか

らっかんせい しんちよう たいせつ  
楽観性と慎重さ、どちらを大切にしているか

ちから ちから たいせつ  
力をこめることと力をぬくこと、どちらを大切にしているか

ながめ め み かたほう たいせつ りょうほう  
長い目で見て、どちらか片方だけを大切にしているか両方ともを  
大切にしているか

…

などの“ライフのあり方”について

かのじょ じんせい ぼく じんせい  
彼女の人生がこっちなら、僕の人生はこっち。

だれ じんせい べつ だれ じんせい  
誰かの人生がこっちなら、別の誰かの人生はこっち。

さくしゃ じんせい さくしゃ じんせい  
この作者の人生がこっちなら、あの作者の人生はこっち。

…

というように――。

もちろん、この結論は、“ライフのあり方の、ふたりの共通点”  
も、7つのワクワク枠が教えてくれることを意味していた。

また、この結論は、ある一個人が、あるときはこっち、あるとき  
はあっちのように、ときに応じてどんな“ライフのあり方”を選ん  
でいるかも、7つのワクワク枠が教えてくれるだろうことを意味し  
ていた。



## 140

図書館への帰り道にて——

「7つのワクワク<sup>わく</sup>粋<sup>す</sup>って、本当<sup>ほんとう</sup>にいろんな“ライフのあり方<sup>かた</sup>”を教<sup>おし</sup>えてくれそうよね。まだ6つまでしか知らないけれど、なんだかワクワクしちゃう♪」<sup>かのじよ</sup>彼女<sup>あか</sup>が明<sup>い</sup>るく言った。

「そうだね。

例えば——

今<sup>いま</sup>を大切<sup>たいせつ</sup>にしようなどの『イマ』ライフ、

将来<sup>しょうらい</sup>の夢<sup>ゆめ</sup>を持<sup>も</sup>とうなどの『ミライ』ライフ、

思い出<sup>おも</sup>を愛<sup>あい</sup>そうなどの『カコ』ライフとか」と僕<sup>ぼく</sup>。

『ミライ』

将来の夢を持とう

今を大切にしよう

思い出を愛そう

『カコ』

「そうね。

それから、

自分<sup>じぶん</sup>が楽<sup>たの</sup>しもうなどの『In』ライフ、

人<sup>ひと</sup>を喜<sup>よろこ</sup>ばせようなどの『Out』ライフとか」と彼女<sup>かのじよ</sup>。

『Out』

人を喜ばせよう

自分が楽しもう

『In』

「そうだね。

ほかにも——

十分<sup>じゅうぶん</sup>休<sup>やす</sup>もうなどの『Off』ライフ、

一生<sup>いっしょう</sup>懸命<sup>けんめい</sup>やろうなどの『On』ライフとか。

『On』

一生懸命やろう

十分休もう

『Off』

健康<sup>けんこう</sup>を害<sup>がい</sup>するまいなどの『Against』ライフ、

健康<sup>けんこう</sup>を守<sup>まも</sup>ろうなどの『For』ライフとか」と僕<sup>ぼく</sup>。

『For』

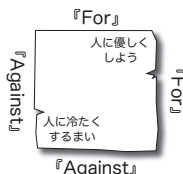
健康を守る

健康を害するまい

『Against』

『For』

「それに、人に冷たくするまいなどの『Against』  
 ライフとか人に優しくしようなどの『For』ライフ  
 とか。



——アレ？ “健康を害するまい”や“人に冷たくするまい”といっ  
 た2つの『Against』ライフの例も、結局、どちらも『For』ライ  
 フの例になっていない？」と彼女。

「——アハッ。確かに、そうだね。“『Against』の『Against』は、  
 『For』である”ってことなんだろうね」と僕。

「——どうして、こうなっているのかしら？ 『Against』ライフの  
 2例を含めて、私たちが挙げたすべてが結局『For』ライフの例に  
 なっているのは、なぜかしら？」

「さあ。それらが、いいなあって思うから？」

「じゃあ、どうして、それらが、いいなあって思うの？」

「——僕らが、それらを好んでいるから？」

「じゃあ、なぜ、私たちは、それらを好んでいるの？」

「——なぜだろう。こっちが聞きたいくらいさ」

その日、僕らは、さらに、「7つのワクワク枠を持っていれば、書  
 店、図書館、学校、社会…を含む、さまざまな“ライフのあり方”に  
 出会える場で、方向音痴にならずに済むだろう」という予想にも至っ  
 た。

音楽終了 ♪夏 Summer

## 141

なつやす さいしゅう び  
夏休み最終日——

キラキラ<sup>はじめ</sup>始めている海<sup>うみ</sup>辺<sup>べ</sup>の砂<sup>すな</sup>浜<sup>はま</sup>に、ふたりで腰<sup>こし</sup>を下<sup>お</sup>ろしてい  
た。図書館<sup>としよかん</sup>からの帰<sup>かえ</sup>りに特別<sup>とくべつ</sup>に寄<sup>よ</sup>り道<sup>みち</sup>したのだ。  
と<sup>と</sup>お 遠<sup>なら</sup>くに並<sup>だ</sup>ぶ2台<sup>じてんしゃ</sup>の自<sup>じ</sup>転<sup>てん</sup>車<sup>しゃ</sup>——。

かのじょ うた だ  
彼女<sup>かのじょ</sup>が歌<sup>うた</sup>い出<sup>だ</sup>した。

♪ Joy of Life のメロディーにのせて

しろ くも  
「白<sup>しろ</sup>い雲<sup>くも</sup> シュークリーム アイスクリーム♪

ドーナツ ワッフル ホットケーキ♪

あお そら う  
青<sup>あお</sup>い空<sup>そら</sup>に プカ<sup>う</sup>リプカ<sup>う</sup>リと 浮<sup>う</sup>かんでいる♪

とり は およ  
鳥<sup>とり</sup>が羽<sup>は</sup>ばたいて カメ<sup>およ</sup>が泳<sup>およ</sup>いで ウサギ<sup>は</sup>がピョンピョン跳<sup>は</sup>ねて♪

リス<sup>あな</sup>が穴<sup>あな</sup>ほって ゾウ<sup>みず</sup>が水<sup>あ</sup>浴<sup>あ</sup>びして メダカ<sup>がっこう</sup>が学<sup>が</sup>校<sup>こう</sup>いって♪

チョウ<sup>はな</sup>チョウ<sup>さ</sup>がダンスして 花<sup>はな</sup>が咲<sup>さ</sup>いている♪

いちご もも すいか メロン ぶどう りんご パイナップル♪

みかん かき バナナ なし キウイ さくらんぼ♪

ゆた だい ち み  
豊<sup>ゆた</sup>かな大<sup>だい</sup>地<sup>ち</sup>に たっ<sup>み</sup>ぷり実<sup>み</sup>っている♪

たいよう ちきゅう ほお そ  
サンサン太<sup>たい</sup>陽<sup>よう</sup>がキスして 地<sup>ち</sup>球<sup>きゅう</sup>が頬<sup>ほお</sup>を染<sup>そ</sup>めている♪

イルカ<sup>こいぬ</sup>がジャンプしている 子<sup>こ</sup>犬<sup>いぬ</sup>がしっ<sup>こ</sup>ぽふ<sup>いぬ</sup>っている♪

みんなが笑<sup>わら</sup>っている♪

あい・フィール・ハッピー♪

そー・ゆー・フィール・ハッピー♪

そー・ういー・フィール・ハッピー♪

ピピピーピピー♪

ゆー・フィール・ハッピー♪

そー・あい・フィール・ハッピー♪

そー・ういー・フィール・ハッピー♪

ピピピーピピー♪

タララ ラーラーラー♪

…

さくし きつきよく ういか  
作詞作曲、初果 ひるね——

パチパチパチ… 僕は拍手しながら「ブラボー♪」と言った。

かのじよ て  
彼女は照れながら「ご清聴、ありがとうございました」と言った。

「——ところで、“ピピピーピピー♪”って、何のこと？」

「“ピピピーピピー♪”には、実は深い深い意味があるのです」

「——」

「——なんてことは、ございません。

ただ、ハッピーの“ピー”を並べてつなげただけ？」

「——え？」

「アハッ！ だって、これしか、このメロディーに合わせようがなかったんだもん。アハハッ♪」

「ブッハッハッハッ…！」 くらえていた僕も、ついに吹き出した。

「ただ、この歌は——

いま わたし ここち  
今の私にとって心地よくて、今の私の中で最も好きになれる“メロディーや言葉”からできているのよ」

「——うん。自分で考えて生み出したんだね」

「——もちろん、最初に頭の中にイメージを作っ、次にそのイメージをベースにメロディーや言葉を育んでいたという意味では、考えながら生み出していたわ。——ただ、私の場合、やっぱり“自分で感じながら生み出した”という方がより正確かも。“好きだなあ。心地いいなあ”を追求する感じで？」

「ああ」

心の中で『カラダ アタマ』を意識していた。

『アタマ』

考えながら  
生み出す

感じながら  
生み出す

『カラダ』

## 142

ザブブーン、ザザザシュー・・・

繰り返されている波——。

「それに—— たとえ頭の中のまっさらなスクリーンに思い浮かべた映像が始まりだったとしても、厳密に見れば、0からすべてを自分で生み出したことにはならないわよね？」と彼女。

「——え？ どういうこと？」と僕。

「だって“I feel happy.”なんて、既に誰かがどこかで使っていた言葉でしょ？ メロディーだって、あまりに単純だし」

「——うん。まあ、そりゃそうかもしれないけど——」

ザブブーン、ザザザシュー・・・

そのとき、なぜか、ひたすら繰り返される波が、大昔から続いて  
いる“地球の鼓動”であるように感じられた。

「——それは、きつと、すべてにおいて同じだよ」と僕。

「——え？ どういうこと？」と彼女。

「0から生み出されていないことは、歌に限らず、自転車も、家も、  
料理も、詩や写真も、動物や植物も、自然も…どれも同じだったこ  
とさ。

どれも既存の何かと何かが組み合わせることによって、新しい何  
かとして生み出されている一面を持っているのさ」

「——ええ、言われてみれば、確かにそうだわ」

「だろ？ もちろん、“ただ単純に組み合わせればいい”ってわけじゃ  
なくて——やっぱり、その“好きだぞ”とか“よいぞ”とかって想  
い？ 感性？ 価値観？ これらも、とても大切になると思うよ」

「ええ、そうね。

——ねえ、話が少し飛んじゃうけど、組み合わせることも、きつと  
大切よね？」

「え？」

「組み合わせるだけでなく——」

「——そうだよ！ その方が、よりいっそう、のび  
のびと新しい何かを生み出しやすくなる」

「でしょ？ それに、そのおかげで材料も枯渇しないで済むわ」

「ああ。——“材料のリサイクル”って感じだね」

「フッフ。そうよね」

『On』

組み合わせる

組み分ける

『Off』

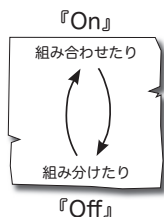
## 143

遠く離れた砂浜では、ある家族連れが、笑い声を上げながら波と戯れていた。海辺のキラキラが少しずつ増している——。

音楽イン ♪ Birthtime

「あらゆる多様な物質は、限られた種類の元素をもとにした、組み合わせたり、組み分けたりの繰り返しによって生まれている。

この組み合わせたり、組み分けたりのプロセスは、きっと、“創造すること”の本質の1つなのさ」と僕。



「——つまり、組み合わせたり、組み分けたりのプロセスが、あらゆる新しい存在の創造を支えているのね？」と彼女。

「きっと、そうだよ。それは、もちろん人間自身も例外じゃないよ」

「え？」

「だって—— 例えば、子どもは、“父と母の両方から、それぞれの一部ずつを分けてもらい、それらが組み合わせられた上で生まれて誕生している存在”じゃん」

「——。あ、そうね——」彼女の顔が桜貝のように色づいたように見えた。

「もちろん、誕生したあとも、さまざまな出会いや別れを繰り返しながら、子どものライフは創造的に生まれ続ける。

だから、それらの意味でも、子どもは“親の完全なコピー”ではないし、“親を単に足し合わせただけの存在”でもない」

「——子どもは新しい存在なのね」

「そうさ」

音楽 ♪ Birthtime 144 に続く

## 144

海辺のキラキラがさらに増していた。

「あなたの“ライフ育ての材料”は、何ですかあ〜？ ♪」 彼女が、ふいに、僕に尋ねた。

「え？——。うーん。やっぱり、今は、湯川秀樹の人生が一番大きな材料かな」と答えた。

「ええ、そうよね。——あとは？」

「あとは—— ニュートン君、心笑君の人生とか、家族の人生とか、担任の先生の人生とか、おじいさんの人生とか、ドラマや映画の中の登場人物の人生とか… ——あ、もちろん、君の人生も！」

「アハッ。ありがとう。——あとは？」

「あとは——」・・・「——え？」 思わず、彼女の方を見た。

一瞬、目と目が合った。

彼女は驚いた様子で視線をそらした。

音楽 ♪ Birthtime 145 に続く



## 145

「私の場合、一番大きな“ライフ育ての材料”は、——私自身の人生かな」 彼女は少し照れながら言った。

「え？」

「私、以前、自分が望む“ライフのあり方”を見つけたくて、いろいろな人生を参考にしていた時期があったわ。小学生のときの、その先生の人生はもちろん、家族や友人の人生、本や歌詞、映画やテレビの中の人生… 本当にいろいろ。

でもね、私、最終的に気づいたの。私は、私自身の人生を見失っちゃ、元も子もないんだなって」

「——」 心の中で『In Out』を意識していた。

## 『Out』

誰かの人生を  
材料にする

自分自身の人生を  
材料にする

## 『In』

もし、自分自身の人生を材料にすることをせず、誰かの人生を材料にするだけだったら、自分のライフを見失ってしまう？

「——もちろん、自分自身以外の人生も、とても大切だし、すてきで貴重な材料になりうるわ。

ただ、“ライフ育ての材料”は、その根本部分に“自分自身の人生”があって初めて本物になると思う。だって—— 私の“体験や思い出、将来への思い…”が、私の源泉なんだもん。

わたし わたし こ 子どもたちのための教師になりたいな。

だいすき せんせい じしん 大好きだった先生自身が、そうであったはずであるように——。

わたしほんとうじこじつげんおも それが、私の本当の自己実現なんだと思う」

ほくたいせつ わす そうだ。僕は大切なことを忘れていた。

おいしくてこ心地良くてまんぞくかんあた おいしくて心地良くて満足感を与えてくれるフルーツみたいな何  
かを生み出すこと。フルーツみたいな存在になること。

ほくじしんりそう それが僕自身の理想のライフであったこと。

ほくぜんおもえがしやうらいゆめ それが、かつて、漠然と思い描いていた将来の夢であったこと。

そうだ。

がくもんあたらほっけんおもぞんぶんい 学問をして、ただ、新しい発見をしながら思う存分生きるだけじゃ  
イヤだ。

がくもんせい か 学問の成果が、フルーツのようなおいしさにつながってほしい。

とくくみさき こちよまんぞくかん その取り組みの先に、フルーツがもたらすような心地良さや満足感  
があってほしい。

がくもんつうじぶんうだ 学問を通じて、自分らしいフルーツを生み出すこと——

ほくほんとうじつげんゆめ それこそが、僕にとっての本当に実現したい夢だ。

ほくほくひとがくしゃ 僕は僕らしく、さまざまな人たちのための学者になろう。

ゆかわひできじしん ゆかわひできじしん 湯川秀樹自身が、そうであったはずであるように——。

ほくほんとうじこじつげんじぶんげんしゆつ それが、僕の本当の自己実現——自分らしいフルーツの現出なん  
だろう。

## 146

海<sup>うみ</sup>辺<sup>べ</sup>のキラキラがピーク<sup>たっ</sup>に達<sup>たっ</sup>している——。

「つまり、そうやって、自分<sup>じぶん</sup>自身<sup>じしん</sup>の人生<sup>じんせい</sup>も材料<sup>ざいりょう</sup>としながら、組み合<sup>く</sup>わせたり、組み分<sup>く</sup>けたりを<sup>わ</sup>通<sup>つう</sup>じて、自分<sup>じぶん</sup>にピッタリの“ライフスタイル<sup>らふいふたいる</sup>や人生<sup>じんせい</sup>の言葉<sup>ことば</sup>”を<sup>は</sup>育<sup>はぐ</sup>み続<sup>つづ</sup>ければ、本当<sup>ほんとう</sup>の自己<sup>じこ</sup>実現<sup>じつげん</sup>——自分<sup>じぶん</sup>らしいフルーツ<sup>ふるうつ</sup>の現出<sup>げんしゅつ</sup>を<sup>は</sup>果<sup>は</sup>たせるんだね」と僕<sup>ぼく</sup>。



「ええ、きっとそうよ。

——ねえ、ところで、たった今<sup>いま</sup>あなた<sup>あなた</sup>が話<sup>はな</sup>してくれたとき、  
『Off On』や『カタチ コトバ』が心<sup>こころ</sup>に思い浮<sup>おも</sup>かんでいたわ。  
それに、“自分<sup>じぶん</sup>で感<sup>かん</sup>じながら作<sup>つく</sup>り出<sup>だ</sup>したという方<sup>ほう</sup>がより正<sup>せい</sup>確<sup>かく</sup>かも”  
と話<sup>はな</sup>していたときには、『カラダ アタマ』を<sup>おも</sup>い浮<sup>う</sup>かべていた」  
と彼女<sup>かのじょ</sup>。

「——アハッ！ こっちもそうだったよ。

それに、さっき、君<sup>きみ</sup>が“組<sup>く</sup>み分<sup>わ</sup>けるのも大<sup>たい</sup>切<sup>せつ</sup>”と話<sup>はな</sup>していたとき  
にも『Off On』が心<sup>こころ</sup>に思い浮<sup>おも</sup>かんでいたし、君<sup>きみ</sup>が“自分<sup>じぶん</sup>自身<sup>じしん</sup>の人生<sup>じんせい</sup>も材料<sup>ざいりょう</sup>”と話<sup>はな</sup>していたときには、『In Out』が心<sup>こころ</sup>に浮<sup>う</sup>かんでいたよ」

「あつ、私<sup>わたし</sup>も！ ——おかげで、さっき、“自分<sup>じぶん</sup>自身<sup>じしん</sup>の人生<sup>じんせい</sup>も材料<sup>ざいりょう</sup>”  
の話を<sup>はなし</sup>、少<sup>すこ</sup>し照<sup>て</sup>れくさくても自<sup>じ</sup>信<sup>しん</sup>を持<sup>も</sup>ってで<sup>き</sup>きた気が<sup>き</sup>するわ。

アハッ♪」

「うん。そんなふうに、7つのワクワク棒を単純に利用することもできるんだらうね」

「ええ、きっとそうだわ。

組み合わせたり、組み分けたりだけでなく、そうやって、それぞれのフレームを単純に利用しても、そのときの自分に役立つ“ライフスタイルや人生の言葉”にたどり着けることがあるのよ」

「そうだね。

それに、各フレームを単純に利用することによって、誰かの“ライフのあり方”——“ライフスタイルや人生の言葉”が、そのまま自分の役に立つのかどうか、チェックできると思うよ」

「そうすると、例えば、お気に入りの誰かの“ライフのあり方”——“ライフスタイルや人生の言葉”のよさや有用性を実感したり確信したりするためにも各フレームを利用できるのね？」

「きっと、そうさ。

さらには、各フレームを上手に利用できれば、誰かの“ライフのあり方”が、どのようにその人の役に立っているのかの理解も深まるだろうし——もしかしたら、その人のためにも自分のためにもなるような新たな“ライフのあり方”の、より効果的な提案さえもできるかもしれないよ」

「そうすると——最終的には、ふたりにとって役立つ“ライフのあり方”にたどり着くためにも、つまり、“ふたりが一緒に生きる”という目標を実現するためにも、7つのワクワク棒を活用できる可能性があるのね？」

「ああ、きっとそうさ」

“ふたりが<sup>いっしょ</sup>一緒に<sup>い</sup>生きる”

という<sup>もくひょう</sup>目標<sup>じつげん</sup>を実現<sup>じつげん</sup>するためにも

7つの<sup>わく</sup>ワクワク<sup>かつよう</sup>枠<sup>かつよう</sup>を活用<sup>かつよう</sup>できる

<sup>かのうせい</sup>可能性<sup>かのうせい</sup>がある

## 147

夏休み中の勉強が、お互いグングンはかどったおかげか、休み明けの最初の試験の成績は、ふたりともよかった。

その調子のまま、飛ぶように実りの秋が過ぎ—— 本格的な冬に入る頃、彼女から報告があった。

「私、推薦、受かっちゃった」

「え？ ——本当？」 思わず僕は聞き返した。

「本当」 喜びと照れがまざった表情を浮かべながら彼女は肯定した。

音楽イン ♪ Joy of Life サビの部分から

「いやっほう♪ やったじゃん！ おめでとう！」 自分のことのように喜び、祝福した。

「ありがとう。あなたのおかげよ。今度は、あなたの番だからね」

「これで僕が受かれば、学部は違うけど、春から同じ大学に通うのかあ。——楽しみだあ！」

「フフフッ。そうね。楽しみ——」

「ようし、僕もゼツタイ合格するぞお！」

「うん。頑張つて。これ——」 彼女の手ひらの上に何かがあった。

「ん？」 手渡されたものを僕は見つめた。

「作ったの。——お守り」

「——ありがとう」 彼女の想いを受け止めるかのように、そのお守りを受けると、大事に握りしめた。

このときの彼女の笑顔には、うれしさと楽しみと不安と祈り…が入り交じっているような気がした。

音楽フェード・アウト ♪ Joy of Life

## 148

その日の夜、勉強が一息ついた頃——

みかんをほおばりながら、“これから自分が生きるために役立つであろう言葉”、いわば、My “人生の言葉”を読み返した。

活動と休養——勉強と休みのリズムを大切に  
 コンディションを整えながら、本番までの日々を過ごそう。  
 本番では、解ける問題を解くこと、効率のよい時間配分に  
 集中しよう。

そうやって、ベストを尽くせば、きっと合格できる。

大学に入ったら、好きな分野やテーマについて、ときに  
 広く、ときに深く、のびのびと自由に学ぼう。

そうしながら、思う存分、自分の可能性を試してみよう。

また、そうしながら、学問を通じておいしいフルーツに  
 たどりつく道、自己実現の道、自分らしいフルーツを現出さ  
 せる道を探ろう。そうやって、自分が、学者として一人前  
 になれるかどうかを見極めよう。

一方で、実際どのような進路を取ろうとも、一人の人間  
 として成熟し続けよう。

それで、それから——

その上で彼女と向き合って、できれば彼女と一緒に——

...

それは、当時、自分の体験や実感…をもとに何回もバージョン  
 アップしてたどり着いていた、自分にピッタリの言葉たちだった。

## 149

しけんほんばんとうじつ  
試験本番当日——

かいじょう おお ひと  
会場は多くの人たちで、あふれ返っていた。

すでに入場を済ませ、いったん試験室の席に着いた僕は、緊張の  
あまり、トイレが近くなっていた。急いでトイレを済ませ——

せき もど ぼく  
席に戻った僕は、受験票を再び机の上に置こうとした。

すると—— ない？ ！！！！

さっきまで、あったはずなのに——。アレ？ ……

いそ せき ひ かえ とお みち  
急いでトイレに引き返してみても、通り道をなぞってみても、な  
かった。——まずい？

ぼく ふくしき こきゅう う け なん こんなん めんどう  
僕は、あせりを腹式呼吸で打ち消しつつも、何らかの困難や面倒  
を覚悟しながら—— じゅけんりょう  
受験票をなくしてしまったことを正直に受付  
ひと はな  
の人に話した。

すると—— 「ああ、届いてましたよ。よかったね」 係員の方  
が、あっさり、そう言いながら受験票を僕に渡してくれた。

「あ、ありがとうございます」

そうして、無事、再び試験室の席に着くことができた。

フゥー。助かったあ——。ありがとう。ありがとう。…

じゅけんりょう とど かた おも しんそこ かんしゃ  
受験票を届けてくださった方のことを思い、心底、感謝した。

——お守りを握りしめた。

それから、試験の心得を思い返した。

ベストを尽くすんだ。

そのために、解ける問題を解くこと、うまい時間配分に集中する  
んだ。…



## 150

試験は、無事終わった。帰宅すると、彼女から電話が来た。

「試験、お疲れさま。——どうだった？」

「——ああ、無事、なんとか——」

「よかった。——じゃあ、ゆっくり休んでね。またね」

「あつ、待った。——電話ありがとうございます。お守りもありがとうございます」

「ううん」

「なんとか合格している！ って感じだよ。ハハッ」

「フフッ。そうね」

「じゃあ、おやすみ。また今度」

「そうね。おやすみなさい」

## 151

合格発表当日——。

当時、その地方大学の合格発表は、テレビ局によって中継放送されるのが恒例だった。テレビカメラが“合格者名簿”をじゅんぐりとなぞってくれるので、一人ひとりの合否が、そのテレビ放送を観るだけで、はっきりわかるという話だった。

発表会場まで遠かったこともあり、まず、そのテレビ放送で合否を確認すると決めていた僕は、家のテレビの前で、今か今かと待機していた。

——いよいよ、その放送が始まった。 ドキドキドキ…

しばらくすると、自分が受験した医学部の合格者名簿をカメラがなぞり始めた。受験番号と氏名の列が画面上を流れている——。

高鳴る鼓動——

ドキドキドキ… 名前があってくれ！ ドキドキドキ…

自分の受験番号は270番台——

合否が判明するタイミングは、その受験番号から、おおよその見当がついた。

——100番台に入った。

ドキドキドキ… 頼むぜ！ 合格してる！

ドキドキドキ…

——200番台に入った。

ドキドキドキ…

いよいよ自分の受験番号が近づいてくる——。

——230番台、——240番台、——250番台

ドキドキドキ…

——260番台！

ああ、もうすぐだ！

——270番台！！

ドキドキドキ…

そして――

その番号を飛び越えたんだ。

ない。

当然、名前もなかった。

・・・

不合格――

人生の形どりの失敗――

ズドドーン！！

## 152

家の外に出た僕は、自転車にまたがると、ペダルをこいだ。

こいで、こいで―― ひたすら、こいだ。

音楽イン ♪冬 Winter

途中で自転車を降りると、歩いて、歩いて―― ひたすら歩いた。

砂浜までたどり着いた僕は、腰を下ろし、そのまま、ボンヤリと海を眺めた。

ザブーン、ザザザシュー …

自分の能力のこと、将来のこと、彼女とのことについて、悲観的な考えが何度も心に渦巻いた。

まさに“絶望のどん底”であり、今にも崩れ落ちてしまいそう  
 だった。もう何もかもがダメになりそうだった。

それは、明らかに人生の危機だった。

それでも――

それに対抗するべく――

おじいさんの知恵――自分自身のためのライフセーバーになって  
 あげる知恵を必死に実践続けた。

スー ハー スー ハー スー ハー …

ただ、ひたすら、心地よい腹式呼吸を取り戻してあげることに全  
 力を注ぎ続けた。

どれくらいの時間が経ったのだろうか？

徐々に気持ち落ち着き――

ようやく、前向きに物事を考えられるようになった。

音楽 ♪冬 Winter 153 に続く

## 153

...

つまり――

人生を変えた方がいいってこと？

新しい“ライフのあり方”を目指すべきだってこと？

“やりたい”だけじゃダメで、なおかつ、“やれる”ことをやれっ  
 てこと？

かのじよ いまじよ  
彼女のことは潔くあきらめよう。

これは、もうどうしようもないことだ。

「ハア—」 とりわけ<sup>ふか</sup>深い<sup>いき</sup>ため息<sup>で</sup>が出た。

だいがくしんがく  
大学進学も、あきらめる？

—それとも、あきらめない？

ゆめ  
夢も、あきらめる？

—それとも、あきらめない？

い くん ここ えくん だいいち し ぼう しゅ と  
そう言えば、ニュートン君—心笑君は、すでに第一志望の首都  
圏<sup>けん</sup>の大学<sup>だいがく</sup>に合格<sup>ごうかく</sup>を決めていたっけ—。

いまごろ ふつり がくしや ゆめ じつげん む  
今頃、物理学者になるという夢の実現へ向けてまっしぐらなんだ  
るうな—。

...

ぼく がくもん  
僕も学問をやりたいよ。

おお ひと なに あじ  
多くの人たちに— フルーツのような何かを味わってもらい  
たいよ。

...

じ ぶん から この ゆめ と ぼく ぼく  
自分からこの夢を取ったら、僕は僕でなくなりそうだよ。

どうしたらいい？ —どうしたい？

...

おじいちゃん— それでも、ライフは、この上ない宝<sup>うえ たから</sup>なんだよ  
ね？

音楽フェード・アウト ♪冬 Winter

「お〜い！」 そのとき、遠くから彼女の声<sup>と お の こゑ</sup>が聞こえた。

## 154

「やっぱり、ここにいたのね。ハア、ハア、ハア…」 近くまでたどり着いた彼女が、息をはずませながら言った。

彼女は、なぜか赤ちゃんを抱いていた。

「——ど、どうしたの？」 その赤ちゃんを見ながら僕は尋ねた。

「——お姉ちゃんの赤ちゃんよ。ハア、ハア…」

「——」 . . .

「——アハッ。ちょうど、子守を頼まれていて——。

そんな最中に、テレビで合格発表が始まっちゃうんだもん。

よりによって、家族みんなが外出したタイミングで結果がわかって——」

「——」

「それで—— まず、あなたの家に行ってみたら、夏岬君のお母さんが『自転車で、いつもの“チャリンポ”に出かけたわよ』って教えてくださって—— 『海の方に行くけれど、死ぬことはないから心配ないよ』とかって、お母さんに話したんでしょ？」

——それで、きっと、ここじゃないかなって。

——アハッ♪ ピタリ賞ね？」

「——。どうやって、ここまで？」

「え？ ——歩いてよ」

## 155

「——」 . . .

「—— 16倍ばいよね？ 自転車じてんしゃの」

「——」

「あ！ この子こを抱だいているから—— さらに2倍ばいで、32倍ばいくらいとか？ アレ？」

「——」

「——うーん。ムズかしい」

「三十さんじゅう—— 七倍ななばいくらいじゃない？ よくわかんないけど——」

「——。 ——フフツ。よかった。元気げきそうで」 彼女かのじょは、そう言いつて、ほほ笑えんだ。

音楽 ♪ Love 156 に続く

## 156

あかちゃんを抱だいた彼女かのじょと僕ぼくは、砂浜すなはまに座すわっていた。

「あっ♪」 突然とつぜん、彼女かのじょが小さく叫さいんだ。

「え？ どうしたの？」

「うん。笑わらったの—— この子こが。あ、また♪

——かわいいね」

あかちゃんあかの笑えみと彼女かのじょの笑えみ—— ふたつの笑えみが向むかい合あってそこにあつた。

赤ちゃんのほっぺを得意気にツンツンとつついている彼女。

「私、知らなかったよ。赤ちゃんて、こんなに小っちゃなときから  
笑うんだね♪ 私、てつきり、赤ちゃんて泣いているだけなんだと  
思っちゃっていたわ」 彼女は、うれしそうに、そう話した。

「——」 . . .

僕も知らなかった。

「——フッ♪ 今、この子が『For』の方向にいるとすれば——  
あなたは、きっと『Against』の方向にいるんだよね。——。

もし“幸せ実感度”大会があったら、今のあなたは、きっと、  
この子に完敗ね」

「——」 . . .

「——。——あなたも抱いてみない？」

「——いいよ」 一瞬戸惑った末に断った。

「いいから——」 彼女は、やや強引に、赤ちゃんを僕に抱かせた。

珍妙な時間が流れた。かと思うと——

「オギャー！！ オギャー！！ …」 赤ちゃんが泣き始めた。

音楽フェードアウト ♪ Love

「——ああ、泣かせたなあ♪ ——おむつは大丈夫そうね。

ほら、あやして、あやして♪」

「って、どうすれば——」 . . . うろたえ状態の僕——。

見かねた彼女は、赤ちゃんを抱きかかえると、うまい具合に  
あやし始めた。

すると—— 赤ちゃんはピタリと泣き止んだのだ。



## 157

「——。カッコ悪すぎ——」 僕は、ポツリと、つぶやいた。

「——」

「——不合格だし。——期待に答えられなくてごめん」

「——。——気にしないで。

——あなたは、あなたよ。今回、合格していても—— いなくても」

「——」

「——私思うの。人生には、こういった社会的なハードルが、きつと、いくつかあるのよ。このハードルは、大学に入るときだけでなく、資格を取るときにも、就職するときにも、ポストを得るときにも、オリンピックに出場するときにも… 同じようにあって——。

社会の中で前進するために、誰もが乗り越えなきゃならないハードル—— 現実的なハードル」

「——」

「もちろん、何度もチャレンジして、やっと乗り越えられる場合もあったりして——」

「——」 . . .

「この不合格は—— “何か大切なことを学べるチャンス” なのよ。

きつと——」

「——」 . . .

いつの間にかスヤスヤ眠っている赤ちゃん——。

「——。ねえ、お願いがあるの」と彼女。

「——どんな？」

「その—— 私わたしも、今度こんど、その岬みさきに連れてってほしいの。

私わたしも一緒いっしょに行いってみたい」

「——。——別べつにいいよ」 断ことわる理由りゆうがないと思おもった。

「やったあ！」

「——」 . . .

この瞬間しゆんかんにも彼女かのじよが社会的なハードルしゃかいてきを乗り越のえていたことに  
気づきいたのは、ずっと経たってからのことだった。

## 158

「ねえ、電話でんわし合あおうよ。これからも、ずっと——。そしたら、  
私わたしが大学生だいがくせいらしくなったところを、いっぱい披露ひろうできるわよね♪

そこから、たくさん刺激しげきを受けてね♪ それで、やる気きが、  
うんと高たかまって、勉強べんきやうがサクサクはかどったりして。アハッ♪」

「——」

「それで—— そうやって、来年らいねん、受うかればいいじゃない？

そうなれば、また同じように一緒いっしょになれるよ」

「——」

「1年ねんなんて、あつという間まよ。——大丈夫だいじやうぶ。余裕よゆうよ」 そう言いっ  
て、彼女かのじよは優やさしくほほ笑えんだ。

彼女かのじよは、こんな情なさけない僕ぼくのために、無理むりして明るあかく振ふるまい、  
精せい一杯いっぱい、元げん気きづけようとしてくれているのだと思おもった。

かのじょ きも こころづか  
彼女の気持ちが、心遣いが、ものすごくありがたかった。

かのじょ きも さつ  
彼女の気持ちを察すれば——

たとえ“今<sup>いま</sup>すぐ<sup>だいがくしんがく</sup>大学進学をあきらめる”という<sup>せんたくし</sup>選択肢がありえても、そんなことは、とても<sup>くち</sup>口に出せない<sup>だ</sup>と思った<sup>おも</sup>。

「——ありがとう。

これからどうすべきか、どうしたらいいか… ゆっくり<sup>かんが</sup>考えてみるよ」と僕<sup>ぼく</sup>。

「——ええ、そうね」

「それに、ここまで、こうやって来てくれて——<sup>ほんとう</sup>本当に、ありがとう」<sup>かんしゃ</sup>感謝の気持ち<sup>きも</sup>でいっぱいだった。

「うん」<sup>かのじょ</sup>彼女は、はにかみながら<sup>ちい</sup>小さく<sup>くび</sup>首を横<sup>よこ</sup>に振<sup>ふ</sup>った。

「バブバブバブウ♪ どういたしましてでちゅう～♪」僕<sup>ぼく</sup>は、あたたかも<sup>あか</sup>赤ちゃんのセリフであるかのように<sup>い</sup>言<sup>い</sup>ってみた。

「フフフッ♪」<sup>かのじょ</sup>彼女は笑<sup>わら</sup>ってくれた。

## 159

さいわ  
幸い——

“好きな道<sup>す</sup>を進<sup>みち</sup>むのが何<sup>すす</sup>よりだ。もし大学<sup>なに</sup>に行きたければ、再<sup>だいがく</sup>チャレンジ<sup>い</sup>してもいい——”<sup>おや</sup>それが親<sup>い</sup>の意向<sup>こう</sup>だった。

その晩<sup>ばん</sup>、いろいろ<sup>かんが</sup>考えた僕<sup>ぼく</sup>は、新しい<sup>あたら</sup>“ライフのあり方<sup>かた</sup>”を育<sup>はぐ</sup>むべく、新しい<sup>あたら</sup> My “人生<sup>じんせい</sup>の言葉<sup>ことば</sup>”<sup>つむ</sup>を紡<sup>つむ</sup>いだ。

まず、もう1年、<sup>ねん</sup>大学合格プロジェクトに<sup>と</sup>取り組む。

それによって、<sup>じつりょく</sup>実力をつける。<sup>のうりょく</sup>能力を<sup>たか</sup>高める。<sup>ちりょく</sup>知力を<sup>みが</sup>磨く。  
<sup>かんせい</sup>感性を<sup>ゆた</sup>豊かにする。<sup>こころ</sup>心を<sup>はくく</sup>育む。<sup>にんげんせい</sup>人間性を<sup>たか</sup>高める。…

この1年は、<sup>ねん</sup>大事な<sup>だいじ</sup>ことを<sup>まな</sup>学べるチャンスだ。

その間、<sup>あいだ</sup>読書体験も<sup>どくしょたいけん</sup>積んで、<sup>つ</sup>視野を<sup>しや</sup>ひろげよう。

そうしながら、<sup>そだ</sup>ライフ育ても<sup>と</sup>取り組もう。

もし<sup>こうかく</sup>合格できた<sup>ば</sup>場合

→<sup>なか</sup>その中で、<sup>おも</sup>思う存分、<sup>そんぶん</sup>夢を<sup>ゆめ</sup>育めばいい。

もし<sup>こうかく</sup>合格できなかった<sup>ば</sup>場合

→<sup>だいがくしんがく</sup>そのときは、<sup>しゅうしよく</sup>大学進学をあきらめて<sup>しゅうしよく</sup>就職することもありうる。

その場合、<sup>ば</sup>たとえ<sup>だいがくしんがく</sup>大学進学をあきらめて<sup>しゅうしよく</sup>就職することになっ

たととしても、<sup>ゆめ</sup>夢を<sup>も</sup>持ち続けることは<sup>ゆる</sup>許されるはずだ。

<sup>がくもん</sup>学問と<sup>かんけい</sup>関係ないところへの<sup>しゅうしよく</sup>就職を含めて、<sup>ふく</sup>どんな<sup>しんる</sup>進路をと  
 るうとも、<sup>がくもん</sup>学問は<sup>つづ</sup>続けられるはずだ。

やろうと思えば、<sup>おも</sup>いくらでも。

<sup>ざいりょう</sup>材料も<sup>い</sup>いっぱいある。

<sup>ほんや</sup>本屋さんとか、<sup>こうきょう</sup>公共の<sup>と</sup>図書館とか…。

そうやって、<sup>じぶん</sup>自分らしく<sup>ゆめ</sup>夢を実現させる<sup>じつげん</sup>方法を<sup>ほうほう</sup>探究しなが  
 ら、<sup>じぶん</sup>自分なりの<sup>そだ</sup>フルーツを<sup>つづ</sup>育て続ければいい。

<sup>だいがく</sup>大学に<sup>はい</sup>入って<sup>はじ</sup>初めて<sup>み</sup>見えることもあるだろう。

それはそれで<sup>だいじ</sup>大事な<sup>おも</sup>のだと思う。

ただ一方で、大学を遠くから眺めるからこそ初めて見える  
 なに  
 何かもあるかもしれない。

大学から距離を置く方が、かえって達成しやすい発見  
 従来の大学や教室に属さない方が、かえって得やすい成果

...

そんなフルーツも、あるかもしれない。

どちらに転んだとしても、そこから何かを学びながら、  
 自分らしい夢の実現、自己実現へ向けて前進できるはずだ。

どちらに転んだとしても、自分らしいフルーツを育て続け  
 られるはずだ。

かのじょ  
 彼女とのことは——

もし、このまま良好な関係を保てれば、それに越したことは  
 ないけれど——

もし彼女がこの関係を望まなくなったのなら、潔く身を引こう。

かのじょ  
 彼女には絶対迷惑をかけたくない。

ぼく  
 僕らの関係がどうなるうとも——

かのじょ  
 彼女には絶対幸せになってもらいたい。

...

このとき、ふと、おじいさんの言葉——“幸せに生きるんじゃぞ”  
 が、心に浮かんだ。

——おじいちゃんに似てきた？

## 160

高校を卒業して間もない雪解けの季節—— コンパリーチェとの  
別れの日を迎えた。

音楽イン ♪春 Spring

赤ちゃんペーパー・コンパスは、まだ産まれていなかった。

——どうやら、間に合わなかったらしいや。

それは、ちょうど、2階の自分の部屋で家の留守番をしていると  
きのことだった。

「大学は落ちたんだよ」 コンパリーチェに初めて報告した。

「ええ!？」 コンパリーチェは、しばしプルプルと震え—— それ  
から、「ああ、わたしのせいだ」と言った。

「バーカ、そんなわけないじゃん。これは自分自身のせいだよ。

“自分に、もっと実力があればよかった” ってことなんだ。

——まあ、人生長くやっていれば、いろいろあるさあ。

アッハッハッ！」 ——やっぱり、おじいちゃんに似てきた？

「ズズー、ズ、ズ… ヒック、ズズー…」

「感謝しているよ。おかげで、この3年間、すっげえ楽しかったし

——幸せだった。

こんなに彼女と仲良くなれたのも、こんなに勉強がはかどって  
成績が伸びたのも… どれも君のおかげでもあるんだよ。

——ありがとう」

「グスン、グスン、ズズー、ズ… きっと、すてきなフレーム・マ  
スターになれるよ。ズズー、ズズー ヒック、ズズー…

夢が実現するように、応援しているからね。

間に合えば——」

「——間に合えば？」 間に合わなかったんじゃないの？

「あ、ううん、いいの」

音楽 ♪春 Spring 161へ続く

## 161

「——あ！ もう、そろそろサヨナラの時間。

これから、いっぱい、いっぱい、いっぱい、うれしいことがありますように——」 そう言うと、コンパリーチェは僕の顔にペツタリまわりついた。

「く、苦しいって。おなかの赤ちゃんに悪いよ」

「いいの。まもなく生まれるから大丈夫なの。よい刺激になるわ」

「いや、よくないんじゃない？」

「いいのよ」 顔にペツタリ。

そのときだ。 ——トウルルルー♪ ——トウルルルー♪ …

1階の電話が鳴り出した。

「あつ、電話。誰かしら？」 そう言いながら、コンパリーチェは離れた。 ——トウルルルー♪ …

「ゴメン。すぐ戻るよ」 そう言いながら、ドアへ向かって歩いた。

「あつ、ちょうど、もう時間。

じゃあね。バイバーイ♪ お元気で～♪」 コンパリーチェが別れのあいさつをしたので、思わず振り返ってあいさつを返した。

「じゃあ、お元気で、さようなら。 ——って、すぐ戻るよ！」

急いで階段を駆け下りた僕は、すばやく電話の受話器を取った。

「ハイ、夏岬です。——ハイ、そうです。——ハイ、ハイ、ハイえ！？ ハイ、ハイ ——ハイ！ ありがとうございます！

——よろしく願いいたします！ 失礼いたします」

——ガチャ。 ゆっくり受話器を置いた。

それから僕は勢いよく階段を駆け上がった。

ダッダッダッ…

「ご、合格だってさ！ 辞退者が出たからって」

よく見ると、コンパスの針の絵も『Off On』の文字も、すっかり消えていた。

「——」 …… しばし呆然——。

全身の力が抜けた僕は、そのままヘナヘナとひざまずいた。

これで—— いいの？

とにもかくにも——

こうして僕にも春が来た。

音楽終了 ♪春 Spring



## 162

春休み、この春から首都圏の大学に行く心笑君が、わざわざ家  
 で、あいさつに来てくれた。

「大学合格、おめでとう」と心笑君。

「ありがとう。井東君も、おめでとう。お互い、よかったね」と僕。

「ああ、そうだね。ありがとう。」

——それと、初果陽さんとのことも、おめでとう」

「——え？」

「うまくいっているようで、ほっとしていたよ。」

ふたりは、お似合いのカップルだよ」

「あ、ありがとう」

「——もう、めったに会えなくなるだろうし、きっと時効だと思っ  
 たら、今話しておくよ。実は、高1の夏休みに、初果陽さんとバツ  
 タリ会って、彼女と話していたんだ。」

——あのとき、君のことが話題になった」

「え？」

瑠音さんと心笑君の会話 in 高1の夏休み——。

「だれか、好きな人がいるのかなあ」赤くなっている彼女——。

「——初果陽さんは、好きな人がいそうだね」

「——」

「——やっぱり、夏岬君？」

「え？ やっぱりって、——ばれちゃった？」

「——」うなずく心笑君。

「お願い。ゼツタイ内緒にしてて。」

かれ わし きもち し わした  
彼に、私の気持ちを知られたら、私耐えられない」

「——。——彼は、君に気があるような気がするよ」

「ええ?! どうしてわかるの?」

「——カンだよ。なんとなく、わかるんだよ。——親友だから」

「ちょちょっと待ってよ! ドキドキさせないでよ」…

「君たちが、うまくいっていると、周囲も幸せな気持ちになれる。そんな、すてきなカップルだよ」めったに笑わない心笑君が、ほほ笑んでいた。

「——」言葉が出なかった。このとき初めて、心笑君が、心笑君らしく、ずっと僕らのことを陰ながら応援してくれていたのだとわかった。ありがたかった。とっても——。

「だから—— おめでとうより、ありがとうの方がピッタリだったかな。

僕は、遠くへ行くけれど、これからも、どうぞよろしく」そう言いながら、心笑君は、湯川秀樹と利根川進の特集記事が載っている科学雑誌を餞別として、手渡してくれた。

「ありがとう。お礼を言うべきなのはこちらの方こそだよ。これまで、いろいろありがとう。こちらこそ、これからも、どうぞよろしく」僕は、とっさに、餞別が、さも準備してあったふりをして、彼を玄関に待たせたまま、2階の自分の部屋へと駆け上がった。

餞別、餞別…

餞別になりそうなものを、必死に探した。

ふと、丸い石“アインシュタイン”に目が釘付けになった。

アインシュタイン——。

急いで心笑君の元に舞い戻った僕は、おずおずと彼に“アインシュタイン”を差し出した。

「いいのかい？ なんだか、すごく大事そうに見えるけれど——」

「前々から、“アインシュタイン”と呼んでいたんだ。

物理学者を目指す君に、ぴったりだよ。きっと、いい、お守りになるよ」

心笑君は、何も言わずに“アインシュタイン”をゆっくり受けると、自分の顔の前で握りしめ、しばらく目を閉じながら頭を少し下げ続けた。

そうしてから、心笑君は頭を上げながら目を開け、口を開いた。

「ありがとう。気持ちは十分受けとったよ。心の中で大事にさせていただくよ」心笑君は、そう言って、“アインシュタイン”を僕に返してくれた。ほほ笑みながら——。

## 163

同じ春から、彼女と僕は、大学生生活をスタートさせた。

ふたりは、それぞれのアパートで、それぞれ一人暮らしを始めた。

その新しい大学生活の中で迎えた最初の初夏——

ふたりとも帰省した折に、約束通り、一緒に岬へ行った。

音楽イン ♪夏 Summer

おじいさんのいる岬へ——。

そう。それは、あれから、ちょうど7年目の初夏だった。

「おお。とっても、かわいらしい子<sup>こ</sup>じゃあ」 彼女<sup>かのじよ</sup>を見たおじいさん  
は言<sup>い</sup>った。

「——」 照<sup>て</sup>れている彼女<sup>かのじよ</sup>。

「おまえさんには、もったいないくらいじゃの？ アッハッハッ！」  
おじいさんは、僕<sup>ぼく</sup>に向<sup>む</sup>かって言<sup>い</sup>って笑<sup>わら</sup>った。

「——」 きまり悪<sup>わる</sup>がる僕<sup>ぼく</sup>。

「では——」 おじいさんは何<sup>なに</sup>やら封筒<sup>ふうとう</sup>を僕<sup>ぼく</sup>に差<sup>さ</sup>し出<sup>だ</sup>した。

「ん？ 何<sup>なん</sup>だい？」と僕<sup>ぼく</sup>。

「第<sup>だい</sup>7フレーム、最後<sup>さいご</sup>のワクワク枠<sup>な</sup>じゃ。この中<sup>なか</sup>に入<sup>はい</sup>っておる」

「お!？」 さっそく中<sup>なか</sup>を見<sup>み</sup>ようとした。すると、

「おっと待<sup>ま</sup>った」と言<sup>い</sup>って、おじいさんは、さえぎった。「中<sup>なか</sup>身<sup>み</sup>は、  
あとで<sup>あと</sup>見て<sup>み</sup>ておくれ」

「あとで——」

「——こいつは究極<sup>きゅうきょく</sup>のフレームじゃ」

「究極<sup>きゅうきょく</sup>!？」

「まあ、厳密<sup>げんみつ</sup>には、究極<sup>きゅうきょく</sup>と、——言<sup>い</sup>われておる」

「言<sup>い</sup>われているって——」

「何<sup>なに</sup>やら“究極<sup>きゅうきょく</sup>の意味<sup>いみ</sup>”を教<sup>おし</sup>えてくれるらしい。

じゃが、いまだかつて、その“究極<sup>きゅうきょく</sup>の意味<sup>いみ</sup>”に、たどり着<sup>つ</sup>いた者<sup>もの</sup>は  
おらん、——らしい。わしも、たどり着<sup>つ</sup>けなかつた、——らしい」

「らしいって——」

「おまえさんらなら、その意味<sup>いみ</sup>に、たどり着<sup>つ</sup>けるかもしれん。

楽<sup>たの</sup>しみにしとるよ」

「——」

「早いもんじゃ。もう大学生かあ」 はるかな水平線を眺めながら、おじいさんは話し続けた。「懐かしいのお。おまえさんが、ここに初めて一人でやって来たときのこと——。おお、ランプベリーも一緒じゃったな」

「——」 . . .

「彼は大きなシャベルを持って、ここに宝探しをするためにやって来たんじゃないよ」 おじいさんは、彼女に向けて話し始めた。

「え？」 少し驚く彼女。

「そして、わしよりもずっと小さな体で、全身が隠れるくらいまで穴を掘り続けよったんじゃない」

「ええー!？」 とても驚く彼女。

「——お嬢さん」

「はい」

「どうもこの若者は、熱中しすぎる頑張り屋さんであるらしい」

「わかります。——フフッ。なんてたって、プチ・マップ作り熱中しすぎて、女子更衣室に入っちゃうくらいですから♪」

「アッハッハッハッハッ！」 おじいさんは笑った。

「——」 いつのまに、その理由を . . .

——あっ、コンパリーチェが、彼女に教えてあげたから!?

——「イメージアップ間違いなしよ。キャハン♡♪」

笑いながら何度かうなずいたおじいさんは、再び口を開いた。

「——どうか優しく見守ってやってください」

「はい!」 彼女の表情が、いつそう明るくなった。

## 164

しばらく視線を水平線に向けていたおじいさんは、ふいに口を開いた。「それでは—— いよいよ最後のお別れじゃな」

音楽イン ♪感謝別れ Thank you, See you.

「え？ 最後？ 何でまた——」と僕。

「これで、ワクワク棒を、7つともすべて知ることになるじゃろ？」

「あ！？ 寝ぼけたこと言わないでくれよ。最後なわけないじゃん」

「じゃが、来る理由が、もう——」

「あるよ」

「——」首を少し、かしげるおじいさん。

「僕の実のおじいちゃんか実のひいおじいちゃんみたいな存在だから。——実の孫か実のひ孫のような存在だから、また来る」

「アッハッハッハッ！」おじいさんは笑った。

「だから、笑うところじゃないって」

「——。若者よ—— ありがとうよ。」

「なんだか、むしように船出したくなってきたぞ」

「船出！？」

「そうじゃとも。——うむ。そうと決まれば、さっそく出発じゃ」

「ああ！？ 船出って、どこに向かって？」と僕。

「何のためにでしょうか？」と彼女。

「まあ、船出と言っても、ちょっとした航海、——プチ航海？」

「あるいは、ちょっとした船での散歩、——フネンポ？」

「ちょっと、わけがわからないよ」と僕。

「人生という旅路には—— 目的や意味が“ありそうでない”ときもあれば、“なさそうである”ときもある」

「——」

「それでは、若者たちよ—— さらばじゃ。達者でな」

「おじいちゃんも、お元気で」「お元気でいらしゃってください」

「ありがとう、じゃあに。——ああ、ちなみに、じゃあには、  
Journey のしゃれだぞ。アッハッハッ！」

そう笑ったつきり、おじいさんは歩き去ってしまった。

それから、しばらくすると——

おじいさんの船が出るのが見えた。

音楽フェード・アウト ♪感謝別れ Thank you, See you.

## 165

「行っちゃったね」彼女がポツリと口にした。

「ああ」僕は船を見ながら、うなずいた。

——何なんだよ？ おじいちゃん。今日は、どこことなく、よそよそしかったし… おじいちゃん、また来るかな。待っているよ。

そのまましばらくの間、遠ざかる船をぼんやりと眺めた。

——ん？

みると、彼女が僕の顔を見ていた。

しばしの時間、ふたりは目と目が合い続けた。

かと思うと——

彼女の、目を閉じた。

!!!

え？ これって—— ドキドキドキ…

僕は緊張しつつも、顔をゆっくり近づけた。

すると、彼女の唇に自分の唇がふれようとする、まさにその瞬間、  
彼女が目を開けた。

——ん？

近すぎる、目と目—— 鼻と鼻—— 口と口——

目をぱちつかせている彼女。

そして——

彼女は再び目を閉じた。

## 166

水平線を眺めて立っているふたり——。

「よかった。ふたりとも合格して——」 彼女が、しみじみと言った。

「ああ」

「——コツコツ取り組み続けてよかったね。勉強——」

「——ああ」 喜びがじわじわと湧き上がるのを感じながら、かみしめるように言った。

音楽イン ♪ Joy of Life



なぜだか急に、海うみに向かって大声おおごえで叫さけびたくなった。

「ワアアアー！！」

すると――

「ワアアアー！！」

彼女かのじょも、海うみに向かって大声おおごえで叫さけんだ。

ふたりして、ほほ笑えみ合あった。

それから――

僕ぼくは、海うみに向かって、力ちからいっぱい叫さけんだんだ。

「大好きだいすだあー！！」

すると――

「大好きだいすいー！！」

彼女かのじょも、力ちからいっぱい叫さけんだ。

さらに、ふたりして、ほほ笑えみ合あった。

たと 例たとえば、目めと目めが合あうこと。

たと 例たとえば、鼓動こどうが高鳴たかなること。

たと 例たとえば、ふたりがキスすること。

たと 例たとえば、ふたりが一緒いっしょであること。

たと 例たとえば、合格ごうかくが、ふたりともであること。

たと 例たとえば、力ちからいっばいの叫さけびであること。

たと 例たとえば、ふたりが両想りょうおもいであること。

たと 例たとえば、ふたりが、ほほ笑えみ合あうこと。

...

これらが、どれも『On』の方向にあることに気づいたのは、それから、しばらく経ってからだだった。

それが、おじいさんの“粋な心遣い”であったことに気づいたのも、それから、しばらく経ってからだだった。

ふたりとも、空と海と水平線の方を眺め続けていた。

両想いであることの喜びをかみしめながら――

相手の存在を、強く強く意識しながら――

音楽♪ Joy of Life

サビのあたりから

そのままエンドロールに続く

7つのワクワク枠 / The 7 Frames For Life

ふたりのコンパス③

第6 フレーム

『Off On』

【完】